

21世紀の生のための

キーワード

——新しい批評のことば——

鈴木英明

Suzuki Hideaki



フェチ

■ フェティシズムとフェチ

「フェチ」という言葉は、「フェティシズム」あるいは「フェティッシュ」の略語として、おそらく1990年代後半から一般化したと思われる。だが、「フェチ」と「フェティシズム」とのあいだには微妙な意味のずれがあるのではないだろうか。『日本国語大辞典』を参照すると、「フェティシズム」の語義として次の三つが挙げられている。

- ① 呪物崇拜。人工物や簡単に加工した自然物に対する崇拜の総称。
- ② 性的倒錯の一種。異性の体の一部や、身に着けたものなどに異常な執着を示し、それによって性的満足を得

ること。

- ③ マルクスの用語で、物神崇拜と訳されることが多い。
(中略)「資本論」における商品の物神性に関する記述
に由来。
『日本国語大辞典 第二版』第10巻〔小学館、2001
年〕より抜粋)

そして、『広辞苑 第五版』(1998年)では、「フェチ」は上記②の意味を表す略語とされている。(『日本国語大辞典』には「フェチ」という項目は存在しない。)しかしその『広辞苑』においても、「フェチ」に関して、「また一般に、特定のものに異常な愛着を示すこと。」という説明が補足されている。たとえば「眼鏡フェティシズム」と「眼鏡フェチ」から受けるそれぞれの語感、完全に同じであるとはいえないだろう。「眼鏡フェティシズム」が淫靡な倒錯の湿り気を帯びているように感じられるのに対して、「眼鏡フェチ」という言葉の響きには、どこか明るく乾いたところがあり、むしろ「眼鏡萌え」という言葉の感触に近い。「フェチ」においては、「フェティシズム」にまつわる性的な倒錯性が希薄になっているということだろうか。

実際、たとえばインターネット上の「キャスフィ」という学生コミュニティの「中学生恋愛相談掲示板」に、「あなたは何フェチ? こんな人が好み!」という質問が掲示され(2008年12月12日)、これに対する応答として、「声フェチ!」、「笑顔フェチかもしれないかな?」、「手と鎖骨が好きです」、「結構匂いフェチかも」、「私は坊主ふえち!」など、約1ヶ月のあいだ

に60以上のコメントが寄せられた。¹ここに紹介したコメントの内容からもわかるように、「フェチ」は、少なくとも2008年の時点において、中学生同士がネット上で盛り上がることのできる「普通の」話題となっているように思える。

しかし、だからといって「フェチ」という言葉から性的な含意が一掃されているというわけではない。ちなみに、漫画『ピーナッツ』の登場人物のひとり、「安心毛布」を肌身離さず握っているライナスを「毛布フェチ」と呼ぶことには、多くの人が抵抗を感じるだろう。「フェチ」はやはり「フェティシズム」と同様に、思春期以降の、性に目覚めた人間にかかわる言葉なのだ。だとしても、両者の語感の違いはどうしても残る。先ほど例として挙げた、「眼鏡フェティシズム」と「眼鏡フェチ」という言葉の感触の微かな違いを手放さないようにしよう。両者の違いは、単に倒錯性の程度の違いに帰せられるのだろうか。この違いは、今日の性的欲望のあり方の変容について、ひいては日本社会の変容について、何かを知らせているのではないだろうか。こうしたことを考えるために、まずは「フェティシズム」という言葉の来歴を簡単にたどっておく必要がある。

■「フェティシズム批判の時代」

そもそも「フェティシズム」あるいは「フェティッシュ」は、フランス啓蒙主義の思想家シャルル・ド・ブロスによって

¹ <http://www.casphy.com/bbs/test/read.cgi/jrlove/1229090401/1%2050> (2010年8月17日アクセス)。このサイトに関する情報は、斎藤光の論文から得た(参考文献を参照)。

宗教の一形態を示す言葉として一般化された。ド・ブロスはその著書『フェティッシュ諸神の崇拜』(1760年)において、次のように説明している。

このフェティッシュという用語は、ポルトガル語の **Fetisso**, つまり魔力をもった、魔法がかかった、神的なもの、神託を下すものという言葉に基づいて、セネガルと貿易をするヨーロッパ商人たちが作り出した用語であり、**Fatum, Fanum, Fari**〔神意、聖所、預言の意味〕というラテン語の語根をもっている。これら神的なフェティッシュは、各民族や各個人がそれぞれ選び、神官たちに儀式で聖別してもらう任意の物的対象にほかならない。(ド・ブロス、11; 強調は引用者による)

この「任意の物的対象」を崇拜することがフェティシズム(呪物崇拜)であり、ド・ブロスはこれを宗教の原初的形態、つまりキリスト教を頂点とする宗教の発展段階における最も低次元にある宗教形態であると考えた。

このド・ブロスの著書のドイツ語訳を読んだマルクスは、いくつかの著述で「フェティシズム」という語を使っているが、最も有名なものは、『資本論』第一巻第一章における、「商品の物神的性格とその秘密」と題された一節だろう。マルクスの複雑精妙な議論を乱暴にまとめれば次のようになる。労働による生産物は、それが人間の諸々の欲望を満たす属性(使用価値)もつという点では、何ら神秘的なところはない。ところが、その生産物が他の生産物と交換されうる商品形態に置かれると、商品としての価値(交換価値)をもつようになる。このとき、

「労働生産物は商品になり、感覚的にして超感覚的な、または社会的な物となるのである。」(マルクス、131) 私たちは、労働生産物が商品形態に置かれると、あたかもその商品が最初から交換価値をもっているように考え、その商品が、(感覚的な)物としての属性とは無関係に、他の商品や人間と(超感覚的な)価値関係を結んでいると思い込むようになる。これをマルクスは物神崇拜(フェティシズム)と呼んだのである。

ここで注意しておきたいのは、宗教のフェティシズムも商品のフェティシズムも、単なる(感覚的な)物を、物を超えた(超感覚的な)モノと取り違えるという錯覚を意味しているわけだが、これらは主観的な意識から生まれる錯覚ではなく、「客観的な錯覚、すなわち(中略)社会意識の諸条件から生まれてくる先験的な錯覚」(ドゥルーズ、109)であるという点だ。

これに対して、性的倒錯としてのフェティシズムは、主観的な錯覚であるように見える。端的に言えば、フロイトはフェティッシュを、女性(母親)のファルス(象徴としての男性性器)の代理物と定義した。子供(男の子)は、女性にはファルスはないという知覚を否認する。女性にファルスがないとすれば、それは女性が去勢されたからであり、そうであれば自分も去勢されるかもしれないと不安に思うからだ。しかし、「女性にもファルスはある」という信念は、現実の知覚に反するために抑圧され、この抑圧された信念と、女性にファルスはないという知覚との妥協の産物として、女性のファルスの代理物すなわちフェティッシュが形成される。そして、成長の過程でこの代理物に性的欲望が固着してしまった人間がフェティシストになるというわけだ。ここでもやはり、超感覚的なモノ(女性のファルス)と感覚的な物(女性のファルスの代理物)とを取り違え

るという錯覚が問題となっているのだが、この場合はあくまでも個人の錯覚であるように見える。

しかし、フロイトが「フェティシズム」に新たな意味を与え、この概念を精神分析の文脈で練り上げて、すでに存在していた「フェティシズム」という言葉に含まれる社会性を、個人の錯覚としての性的フェティシズムから完全に分離することはできない。逆にいえば、フロイト以降、社会的な錯覚としてのフェティシズムは、性的倒錯としてのフェティシズムに取り憑かれているのだ。たとえば、「三島由紀夫は天皇制をフェティッシュ化している」という言明から、天皇制という社会的・文化的制度と三島とのエロティックな関係を想起しない方が不自然だろう。また、ヴァルター・ベンヤミンは、社会的なものである商品と、「無機的なもののセックス・アピールに参ってしまうフェティシズム」とのあいだに本質的な関係があることを嗅ぎ取っている（ベンヤミン、340）。ある倒錯者にとって、たとえば女性の脚がフェティッシュであるならば、その脚は、性的満足を与える対象であると同時に、「魔法がかった、神的なもの」（ド・ブロス）あるいは「社会的な物」（マルクス）としての神秘性を引きずってのものである。「フェティシズム」という言葉は、性的な（私的な）ものと社会的なものとをつなぐ重要な蝶番のひとつだったのだ。だからこそ、性的なものを含むさまざまな現象の背後にフェティシズムという錯覚の仕組みを見出すことが、近代社会に対する批判として機能した時代があったのである。（1984年に上梓された丸山圭三郎『文化のフェティシズム』は、そうした「フェティシズム批判の時代」の末期を代表する著作だろう。）

■ フェチとシニシズム

では、以上のような議論の文脈に、近年登場した「フェチ」という新語を置いてみると何が見えてくるだろうか。試みに、「三島由紀夫は天皇制フェチである」といってみよう。これを口にして失笑を禁じえないとすれば、この言明の滑稽さは、冒頭で示唆したように、「フェチ」が「萌え」すなわち「おたく」的な心性を表す言葉に類似していることから生じているのではないだろうか。この点について、「マニア」との対比によって「おたく」の心性を浮き彫りにする斎藤環の以下の指摘が参考になる。

「おたくの熱狂」は「マニアの熱狂」よりも演技性が高いのだ。（中略）そうはいっても、けっして醒めているわけではなく、かといって我を忘れて熱狂しているわけでもない。この「斜に構えた熱狂」にこそ、「虚構コンテクストに親和性の高い」おたくの本質があるだろう。後でも触れるが「〇〇萌え」という表現が、このあたりの呼吸を見事に表現している。（斎藤、38-39）

この引用文とは別の頁で、斎藤は「マニア」をフェティシズムに近接させているが、これと対比させていえば、「おたく」はフェチと親和性が高く、フェチの熱狂とは「斜に構えた熱狂」であるといえるだろう。（ただし、斎藤は「フェチ」を「フェティシズム」の単なる略語としてしか用いていない。）フェチとは、「虚構コンテクスト」におけるフェティシズム、ないしは擬制的フェティシズムであり、こういってよければ、それは「なんちゃってフェティシズム」なのである。

また、倒錯性という観点から見た場合、フェティシズムとフェチとの違いは、倒錯の程度の違いというよりも、性的満足のリアリティをどこに求めるか、という志向性の違いなのである。つまり、フェティシズムにおいては、ベタな現実の水準における任意の点に欲望が固着するのに対して、フェチにおいては、「虚構コンテクスト」における任意の点に欲望が擬制的に固着する。したがって、フェチがフェティシズムほど倒錯的に見えないのも当然だろう。フェチとは「普通の倒錯」(十川幸司ほかを参照)なのだ。

さて、フェティシズムとは、すでに見たように、広い意味では感覚的な物(非-真理)を超感覚的なモノ(真理)として錯覚することであり、だからこそフェティシズムに対するさまざまな角度からの批判は、一種の近代社会批判になりえたのである。しかし、「なんちゃってフェティシズム」であるフェチは、非-真理を真理として擬制的に錯覚する。つまりそこには、錯覚であるとわかっていながらあえて錯覚するというシニシズムが潜んでいるのだ。したがって、かつてのフェティシズム批判とは異なり、フェチ的錯覚に対する批判は批判にはならず、またその「批判」は社会的な広がりをもたない。というのも、あえて錯覚している者に錯覚のからくりを説いても当然無効であり、また、「虚構コンテクスト」に向かうフェチの性的欲望は、社会的現^{リアリティ}実という重力の作用から相対的に自由であるからだ。

「個人的なことは政治的なこと」というラディカル・フェミニズムの標語は、「フェティシズム批判の時代」においては、私的なセクシュアリティと大文字の政治との(共犯)関係を暴くという意義をもっていた。しかし「フェチの時代」(これを

「新自由主義の時代」といい換えることができるかもしれない)においては、それは性のミクロ・ポリティクスの自己言及的な閉域をしか指し示していないように思える。ここでは、個人的な(性的な)ことと大文字の政治とをつなぐ回路はほとんど絶たれてしまっている。「フェチ」という言葉の「明るさ」は、シニシズムが蔓延した時代の無力さの裏面なのだ。「フェチの時代」という、一様に明るく陰翳のない、そこが袋小路であることすら意識されない袋小路。この袋小路から抜け出し、これまでとは別の「性政治」というアリーナを創設することはできないのだろうか。

ここで、フェティッシュという言葉が生み出された16-18世紀の西アフリカにもう一度立ち返ってみよう。ウィリアム・ピエッツは、フェティッシュの語源についてこう述べている。ド・ブロスによってフェティッシュの語源とされた“Fetisso”は、じつはピジン語(混成語)であり、“feitiço”という中世後期のポルトガル語に由来する。そして、この“feitiço”は、「つくられた」という意味をもつラテン語の“facticius”(英語では“manufactured”)から派生したものである、と。そして、ピエッツが繰り返し強調するのは、フェティッシュは、まったく異なる社会・文化に属し共通の価値コードをもたない人間同士が交差(交易)する場所で「つくられた」ものだということである。

こうした議論を受けて、デヴィッド・グレーバーは、価値観を共有しない者同士が交易の場で新たな関係を築くために一種の社会契約として「つくった」もの、それがフェティッシュであると主張する。たとえば、どちらかが契約を破った場合には災いが降りかかるということを、ライオンの尻尾にかけて双方

が誓う。すると双方は、ライオンの尻尾というフェティッシュに災いを起こす力などないことを（理論的には）知りつつ、この力に（実践的には）縛られることになるのだ。これがライオンの尻尾である必然性はない。先のド・ブロスからの引用にもある通り、フェティッシュは人間が「選ぶ」ものなのだから。恣意的に選ばれたライオンの尻尾に神秘的な力を与えたのは、契約する双方の人間である。そして、その力に縛られるのも双方の人間である。こうして、フェティッシュによって異質な者同士が新たに社会的関係を構築することが可能になる。現代においても、新たな社会形式、新たな共同体を集団的に創造するときにはこうしたフェティッシュがある程度は必要なのだ、そうグレーバーは述べる。フェティッシュのこうした力はもちろん危険なものであり、グレーバーもそれは自覚している。人間がつくった「神々」が、逆に人間社会を死に至らしめる。歴史において繰り返されてきた悲劇である。

そこで、新たな社会形式を創造する際に、こうした危険性を合わせもつフェティッシュに代えて、フェチを導入することが考えられる。フェティッシュには神秘的な力があると、擬制的に錯覚することがフェチなのだから、その聖なる力が危険な水準にまで増大したとき、フェティッシュの効力が及ぶ「虚構コンテクスト」から降りてしまえば、つまり「擬制」をやめてしまえばいいだろう。しかし、いうまでもなくここにもディレンマがある。最初は遊び（擬制）のつもりが、いつのまにか本気になっていたり、気づいたときにはもう後戻りできなくなっていたという話を、私たちはいやというほど聞かされてきた。

しかし、この危険のただなかにこそ好機を見出すべきではな

いか。分断されアトム化した個々人を凝集する集団的フェティッシュに擬制的に熱狂しつつ、もはやそうした「虚構コンテクスト」から降りられなくなっていることに気づくとき一挙にせり上がってくるもの、それが現実的なものである。私たちは、「虚構コンテクスト」という現実に穴を穿つ、いや穴それ自体である現実的なものを目の前にして言葉を失う。そこでは、虚構と現実の対立を支えていた座標そのものが崩れ去り、言葉を拒絶する非-意味がぽっかりと大きな口をあけているからだ。しかし、そうした失語の淵においてこそ、新たな社会形式を創造しようという（擬制的でない）意志が芽生えてくるのではないだろうか。局所的なものであれ全面的なものであれ、社会形式の根本的な変革は現実的なものの介入なしにはありえない。フェチ的シニシズムという袋小路の突破は、フェチという擬制をとことん享樂することから始まるのかもしれない。それは、ごく「普通の」実践なのである。

〈参考文献〉

ヴァルター・ベンヤミン「パリ——十九世紀の首都」『ベンヤミン・コレクション』I、浅井健二郎編訳（筑摩書房、1995年）

シャルル・ド・ブロス『フェティッシュ諸神の崇拜』、杉本隆司訳（法政大学出版局、2008年）

ジル・ドゥルーズ『差異と反復』（下）、財津理訳（河出書房新社、2007年）

ジークムント・フロイト「フェティシズム」『エロス論集』、中山元編訳（筑摩書房、1997年）

デヴィッド・グレーバー『資本主義後の世界のために——新しいアナーキズムの視座』、高祖岩三郎訳・構成（以文社、

2009年)

カール・マルクス『資本論』(一)、向坂逸郎訳(岩波書店、

1969年)

丸山圭三郎『文化のフェティシズム』(勁草書房、1984年)

斎藤光「性的フェティシズム」概念と日本語文化圏『フェティシズム論の系譜と展望』、田中雅一編(京都大学学術出版会、2009年)

斎藤環『戦闘美少女の精神分析』(2000年)(筑摩書房、2006年)

十川幸司・原和之・立木康介「座談会・来るべき精神分析のために」『思想』No.1034(岩波書店、2010年)

David Graeber, “Fetishism as Social Creativity.” *Anthropological Theory* 5 (2005): 407-38.

William Pietz, “The Problem of the Fetish I.” *Res: Journal of Anthropology and Aesthetics* 9 (1985): 5-17.

(山脇学園短期大学准教授)